

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：渡部カンコロンゴ清花（わたなべかんころんごさやか）
- (2) 年 齢：30 歳
- (3) 参加事業：第 24 回「世界青年の船」事業（2011 年）
- (4) 職 業：NPO 法人 WELgee



■ 応募のきっかけ

高校生の時に、市役所で「世界青年の船」事業（SWY）参加青年の募集ポスターを見ました。大学生になったら絶対に応募したいと思っていて、大学 1 年生の時に合格しました。

まだ**大学 1 年生でしたので、学問の世界も最初の一步**という時期で、活動や実践もまだまだ始める前だった**自分の視野を広げ、視座を高めてくれた**ことが大きかったです。参加青年は 19～29 歳という年齢層で、全員自分より年上だったことは、プロコン（pros cons「賛否」）があったと思います。良かったことは、スポンジのように全てを吸収できる時期だったことです。何もかも新鮮でした。少し残念だったのは、毎日さまざまなインプットがあったのですが、自分が専門性を持っている分野がまだなく、アウトプットや貢献の機会が作りきれなかったことです。世界から集まる OPY（Overseas Participating Youth「外国参加青年」）たちはいろいろな分野ですでに活躍していました。今となっては、20 代後半で乗船していたら、ネットワークをいかすという点ではもっとプラスになっていたのではないかと思います。

また、SWY は私にとって、英語での初めての本格的なコミュニケーションの機会になりました。今でこそ、日々仕事で英語を使っていますが、当時は受験のための英語しか学んだことがなく、学校で学んだ英語がどのくらい通用するのか試してみたいという気持ちが強かったです。関わりたい、話し合い、わかり合いたいという気持ちが、英語学習に火をつけてくれました。

さらに、**休学をしている大学生たちに出会ったことも、自分のその後のキャリアに影響を与えています**。結局、大学を 2 年休学し、1 年は現地 NGO での駐在員、翌年は国連開発計画（UNDP）の平和構築プロジェクトのインターンとしてバングラデシュに駐在することになりました。

学業との両立はどのように行っていましたか。

事前研修と大学のテスト期間が重なりました。テストが受けられないことを 5 名くらいの教授と個別に交渉して、認めてもらったのですが、憲法の先生だけはダメでしたね。「原則は変えません」と言われてしまいました。さすが憲法の先生と感心した覚えがあります。結局、この授業は翌年もう一度受講することになりました。自分がどうしても参加したい SWY のために、誰とどのように交渉するのか。1 年前まで高校だった私にとって、授業とは、あらかじめ決まっているものをただ受けるだけでよかったのです。でも、大学生になったとたん、すべてを自分で考え、決めていかなければいけないことを痛感しました。

休学しているのはどの国の学生が多かったのでしょうか。

日本の学生が多かったです。「今 5 年生です」とか「6 年生です」という存在に初めて出会いました。私は静岡県の公立の大学に通っていましたが、大学 6 年生なんて会ったことがありませんでしたし、休学した人も学年で 3 人いるかいないかという状況でした。SWY では、いろんなアクティビティをしている人たち、世界一周している人とか、中東の女子教育について研究したいから休学して、中東 3 か国にいたという人や、休学して留学していたという人、留学から帰って来て船のプログラムを見つけて応募したという人たちに会いました。このまま就活するのは違和感があるので、もう少し視野を広げたい

から参加したという人もいました。内閣府という国のプログラムですから、事業自体は非常にきっちりしているのに、参加しているのは型破りな人たち。このギャップがおもしろいなと思いました。

特に影響を受けたプログラムは何ですか。

参加者が自主的に立ち上げるサークルのようなプログラムです。私は、日本語クラスを主催しました。大学で日本語教員養成課程を選択していましたので、何かお役に立てるかなと思い、手作り教材を使って開催してみました。SWY には日本に興味がある OPY が参加していますので、喜んで学びに来てくれました。授業で扱った言葉が船内で「プチ流行語」みたいになることがあったり、JPY（日本参加青年）同士の会話を聞いて「あ、それ知ってる！習った！」と反応してくれる OPY がいたりして楽しかったです。

私は英語にもものすごいコンプレックスがあったんです。高校では受験英語しか勉強していなかったもので、ディスカッションでは何回も泣きました。すごく興味があるトピックなのに、発言できなくて、悔しい思いをしました。ディスカッション以外にも悔しかったのは、夜の自由時間に、「宗教に興味ある人、一緒に話そう！」などと言って自主的に集まって話をする機会があってもついていけなかったことです。受験英語に宗教なんていうトピックはなかったもので、私の英語では太刀打ちできなかったんです。道具を持っているのに使えない状態からどのように自分の思いを伝えていくべきなのか相当悩みました。同じグループのカナダの PY（参加青年）にこの思いを話したら、「私は生まれてこのかた英語がネイティブだから、みんなが私の言語に合わせるのが当たり前で生きてきたから、ジェス（私のニックネーム）の悔しい気持ちを『分かる、分かる』って言ってあげられないんだけど……。でも、私は英語しかしゃべれない。他の人たちが日本語とかスリランカ語とかアラビア語とか話しているのに……。と自分の思いを語ってくれました。それ以来、何か分からない話があったら、今の話は何？と彼女に教えてもらうようになりました。あるプレゼンテーションは、トピックにとっても興味があったのに、内容が全く分かりませんでした。「全然分からなかった……」と彼女にこぼしたところ、「大丈夫、Indian English で私もさっぱり分からなかった！」って。本人は自信満々でしゃべっていたけれど、ネイティブの彼女も分からなかったんですって。そうか、分からないのは自分だけではないときもあるのだと安心しました。

誰かをまとめたりするなどリーダーシップを発揮する経験は、事業参加前までにありましたか。

リーダーシップには、いろんな形があると思うんですが、「こんなことやってみよう」と思って「旗を立てる」ことは、自分の特性上よくやっていました。ただ、そこからチームを作って、マネジメントしてオーガナイズしていくのは得意ではありません。だから、これまで、最初に私が旗を立てて、そこに集ってくれた人たちと、メンバーの特性を借りながら一緒に進むということが多かったです。知らない世界に対する好奇心と連動して自分は動きがちという認識があり、SWY もその一環です。静岡にいただけ、大学に行っているだけだと見えない世界を知りに行きたいと思ったんです。事業参加時は、リーダーシップを発揮しようとして挫折するといった経験もまだなかった頃でしたので、船ではインプットが多かったことは良かった点でもありますし、残念だった点でもあります。

■ 内閣府の事業でしか得られない経験

「郷に入っては郷に従え」と言われますが、その「郷」がない異空間が「世界青年の船」事業です。「普通」なんてものは世界にはありません。互いの習慣、文化、宗教、価値観を尊重し合って生きるとはどういうことなのか。鳥肌が立つような感動、悔し涙に笑い泣き、一つ一つの瞬間が今の私を作っています。これからはニュースで仲間が住む国名を見たとき、彼らの笑顔が浮かんでくるでしょう。世界中に国境を越えた一生の家族ができたことに心から感謝して、彼らに負けないように輝いて今日も私は日本で自分らしく生きていこうと思います。

<https://24thshipforworldyouth.wordpress.com/2012/05/19/swy24column1/>

事業参加の経験が現在のキャリアパスにどのように影響していますか。

大学1年生で参加したということもあり、キャリアへの直接的な関連はないと思います。ただ、自分が今まで、中学、高校、大学で、いかに受け身で授業を受けてきたか、痛いほど思い知るようになりました。

船内でのディスカッションでは、質問、コメントで手が挙がるのは当たり前。

先生が質問は？なんて聞かなくても、常に誰かの発言で授業が進んでいく。

誰かのコメントに誰かがコメントして、それに意見して

そのためには、ノートだけ取っていたらついていけないの。

いま、しゃべっている人の話を全力で聞いて、それに対する自分の意見を頭の中でまとめて、アウトプットしないといけない。どんなにすばらしい意見があっても、秘めていたら意味がない。

これは、英語力だけの問題じゃないなって、何度も悔しい思いをした。

間違っているとか、合っているとか、関係なくて、自分はそのことについてどう思うか、これがとても大切。

主体的に。すべてにおいて主体的に。

これが日本に戻って、大学に戻ってできるかどうか、

私は試されている。気がする。

参照 (<https://sayaka.eshizuoka.jp/e858030.html>)

上記で書いていることは、10年たった今でも、日々の仕事の中で痛感していることです。これまで当たり前と思っていた**学びや教育のスタイルをぶち壊す生の経験**をさせてもらったと思っています。

「これまで当たり前と思っていた学びや教育のスタイルをぶち壊す生の経験」とはどんなことですか。

事前研修で出会った JPY は、ぶっ飛んでいる人たちだと思っていたのですが、船に乗って OPY と交流するようになったら、JPY がマイルドに思えるくらい、OPY がぶっ飛んでいました。管理部の人が一生懸命説明しているのに、自分の言いたいことを話し始める OPY には驚かされました。でも、そういう OPY と接するうちに、彼らとは与えられたプログラム通りに日々を過ごすのではなくて、自分はこうしたいとか、こうすればよくなると真剣に考えていることが分かってきました。大人が作ったプログラムをただ受講するためだけに来たのではないのです。船内では共同生活をスムーズにおくるために自分たちでルールを作っていきます。こんなのナンセンスだとか、もめることもありましたが、「それで、君はどう思う？」とよく聞かれたんです。まさか、そこで自分の意見が求められると思っていたから、とっさに答えられないんですね。何も考えないで生きてきたわけではないのに、何も言えない自分がいました。すべての事象に対して自分はどのように考えているのかを、どのタイミングで聞かれても答えられるように主体的に生きていかないと、この船ではダメなんだと悟ったのが大きな経験でした。

外国参加青年とのやりとりの中で印象的だった出来事がありますか。

キャビンメイトとはずいぶん衝突しましたね（笑）。「私」を持っている人たちだったんです。すべての特性がプラスに向かう時とマイナスに向かう時があるということを知りました。例えば、事業の最初の頃、私は発言することは良いことだと思っていました。自分の意見を率先して言えないのは、自分の短所だと感じていたからです。でも、観察していると、話したい人がいるのに、その人の話を全然聞かないで自分が言いたいことばかり言う人や、たくさん発言していたけれど、結局、言いたかったことは何なのかよく分からず、「発散できた！」とばかりに自分だけが満足している人がいることに気付きました。一方で、ある JPY は、あまり自分の意見は言わないのですが、いろんな人の意見を注意深く聞いたうえで、「なるほど、彼が言っていることと、あの人が言っていることはここが共通しているから、次はこの点について話し合わない？」と言っていました。この思慮深い JPYのおかげで、次のディスカッションに進めることもありました。このようにして、負い目に感じていたり、

自分の短所だと思っていたりしたことが、実はプラスの側面として働くこともあるかもしれないと気付かされることがありました。自分にはないものばかりが、ついつい見えてしまうけれど。

また、「『自分』を持っていること」と「他の人と一緒にやっていくこと」の間で、考えさせられることが多々ありました。キャビンメイトは非常に「個」が強い人でした。きらきらしている面もありましたが、その非常に強い「個」同士がぶつかることもありました。それで3人でよく話し合いをしました。これが一泊二日の合宿だったら、「自分とは異なる人と過ごした美しい経験」で終わったと思います。でも、船内では毎日一緒に生活しなければいけない相手ですから、話し合っただけでプチルールを作っていました。例えば、自分は寝ているのに、夜中の2時や3時に部屋でがらがん音楽かけられる日々が続いたらストレスがたまりますよね。でも、その時間に音楽を聴きたい人にとっては、とにかく音楽を聴きたいんですよ。こういう小さなことなんです。相手と話し合おうとするかどうか。「あと10何日だから、わざわざここで言わなくてもいいかな」と思ってしまう自分の気持ちとどのように折り合いをつけるのか。思い切って話してみようかな、でも、あなたがいけないという話し方はよくないから、どんなふうに伝えようか・・・落とすところをどこにしようか・・・。こういうことを考える日々だったんです。こんなことは配布されたしおりには書かれていないんですよ。自分たちで課題を見出し、解決策も見出すということの連続でした。

多様性に関してはいろいろな経験をしました。事業に参加して、初めてイスラム教徒の人に会いました。規律を厳格に守っていました。どんなに仲良くなってもバスケットの時に異性の相手とハイタッチしたらダメ。食べ物にも制限がある。日本から持って行ったうなぎパイの成分をどこまで説明すればいいのか悩みました。この人たち、日本に来たら、どれだけ大変なんだろうと思いました。食べられるものを発見できるのだろうかと思案したことを覚えています。

仲良くなった男性のOPYとデッキできれいな夕日を見ていたことがありました。そのOPYが「きれいな夕日だね、いつかここに僕はボーイフレンドと一緒に来たいな」と言ったんです。いいね～と反応しましたが、今でこそ友人にもいるLGBTQの人たちに会ったことがなかった当時19歳の私は、「え？ボーイフレンド？男の子が恋愛対象なの？」と頭の中では、こういうときはなんと応答したらいいかを全力で考えていました。

外国参加青年の意識の高さや、この事業にける思いなど、日本青年と比較してどのような違いがありましたか。

OPYは国を背負ってきているという意識が強かったと思います。そのようなOPYと出会って、**私たちも日本を背負ってここにいるのだと気づかされた**ことがありました。ポスターや資料にはたしかに「日本代表参加青年」と書いてありましたが、これが何を意味するのか認識していませんでした。OPYは自分の事業をやっている人、国の仕事をしている人、学校の教育長をしている人、地域環境コーディネーターの仕事をしている人など、様々な仕事をしている人たちがいました。彼らは船での情報とネットワークを仕事やライフワークに生かそうとしていました。船での日々をエンジョイするだけではなく、出会った人と何ができるのかを探していました。「それ、おもしろいね。一緒にやろうよ！」という会話がよく聞かれました。当時、大学1年生の自分には、まだ何もありませんでした。組織も所属もない。この人すてきだから一緒にお仕事したいねとって始められるものが何もなかったのです。恐らくOPYも私のことをone of the studentsだと見なしていたと思います。OPYの中にも不満を感じている人がいたのも事実です。なぜ、英語も話せない学生がこの事業に参加しているのか。彼らは何しているのか。私もこの「何しているのか？」と思われていた一人だったんです。残念ですが、OPYとはレベルが全く違うのです。言葉も社会的なポジションも社会的な責任も全然違うのです。今回の経験を自国に持って帰って、自分の仕事をさらに発展させようと考えて事業に参加しているOPYと比べたら、当然、学生であるJPYとの意識の差は大きかったと思います。

■ 船を用いた国際交流の強み

現在は、コロナの影響で対面での研修や合宿どころか、ほとんどがオンラインの関わりとなってしまいました。留学などでもどっぷり現地に浸かる点では共通していますが、船はそれが何倍にもインテンシブだと思います。良い意味で、逃れられな

い。徹底的に他人と向き合い、自分と向き合う必要がある。うまくいかないことが出てきた時に、初めて、今自分が、これまでの自分の comfort zone から出ようとしていることに気が付く。この繰り返しでした。ここは船事業の大きな強みだと思えます。

■ 下船後のネットワーク構築に必要なこと

下記にも書いているのですが、惜しいと思うのが、船中でのつながりが非常に濃いものであったとしても、その後、維持しようとする仕掛けがない限り、普段の忙しい生活の中で、つながりが薄れていってしまうということです。乗船前の研修があれだけ充実していたので、下船後のネットワークやつながり構築にプログラムそのもののリソースが少しでも割けると、意義が数倍にも増すと思えます。

こちらのブログに当時の学びなどがまとめてあります。<https://sayaka.eshizuoka.jp/e858030.html>

■ 事後活動について

日本に逃れてきた多国籍な人々とともに「自らの境遇にかかわらず、ともに未来を築ける社会」の実現を目指し、活動をする団体 WELgee を立ち上げ、日本に逃れる難民申請者のエンパワメントに関わる活動をしています。（[NPO 法人 WELgee](#)）

● ご参考：<https://globe.asahi.com/article/13364241>

■ 思考の道具箱

「この経験が直接これにつながりました」という事例は実際のところ、あまりないです。今やっている WELgee の活動もそうです。現時点より一つ手前にいた自分が何を考え、どう動いたかに影響されているのです。当時その判断をした自分は、その一つ手前の自分に影響されています。このように時をさかのぼっていくと、確かに船での経験は確実に今の私に影響を与えていると思えます。大学 1 年生の時、19 歳の時に船に乗った自分が、下船後いろいろなアクティビティに足を運び始めたこと、大教室で聞いていれば単位が取れるような大規模な授業よりも、少人数の授業が面白くなって、ディスカッションに参加するようになったのも、確実に船の影響です。「休学するなんて、親に嫌な顔されるし」と周りのみんながしり込みしていた中で、「そんなに大変なことなのか」と思って 2 回も休学したことも船の影響です。大学の同じ学年の中には休学する人などいなかったんですが、船の仲間のことを思い返してみると、休学している人たちがとにかたくさんいました。そういう仲間と接しているうちに、休学なんてたいしたことないと思うようになりました。

直接的にあのネットワークがここにいかされたという話ではありませんので、言葉で説明するのが非常に難しいのですが、特定の出来事が、直接仕事につながったというよりは、いろいろな経験が数珠つなぎのようにつながっていったように思えます。考えるための視点を与えられ、次の意思決定の際にそれを自分の道具箱から取り出せるようになりました。単なる良い経験だったというのではなく、**自分の思考を形作ってくれた経験**でした。

物事がうまくいっているときは、この道具箱はしまっておくんです。でも、何か難しい状況に直面して、自分の価値観が問われたり、自分の未熟さに対峙しなければいけなくなったりすると、この道具箱の中から「たとえば、昔あんな経験をしたことがあった」と必要なものを取り出すんです。もし、**19 歳の時に船に乗っていなかったら、今、取り出せる道具がもっと少なかったら**と思うんです。

■ 事業参加時の国際的・地域的な人的交流

当時のサブナショナルリーダー、管理部の方とは、現在でも一緒に仕事をさせていただいています。JPY の同期だった方は、NPO 法人 WELgee にて、プロボノ活動に参画してくださっています。当時の国立オリンピック記念青少年総合センターの所長には、講演会に呼んでいただいたり、静岡県 IYEO の皆さんからは、講演会で「祖国を諦めても未来を諦めない若者たち～日本の難民の現状と希望～」という話をする機会をいただいたりしました。**もっといかしたい人的リソースがあるのですが、いかせていないことがもったいないと感じています。**

また、船でルームメイトだったインドのパーラの結婚式に参加するためにインドまで行きました。家族みんなで大歓迎してくれて、船と一緒に過ごした日々を思い出しました。

今後は 5 年、10 年、年長の先輩方で、社会で活躍している方々と、参加年度を超えた交流がもっとできると嬉しいです。

「もっといかしたい人的リソースが、いかせていない」とはどんな状況でしょうか。

私は下船後に日本にいなかったため、静岡県 IYEO の活動にもほとんどかかわれず、本当に申し訳なかったと思っています。こういう状況でしたので、今、誰がどこで何をしているのかがよく分かっていないのです。「私は船に乗った（内閣府の国際交流事業に参加した）経験があります」という人を見つける方法がないように思います。**プロフィールに事業参加経験を書く人がほとんどいらっしゃらない**のではないのでしょうか。例えば、私は世界経済フォーラム(ダボス会議)がもつユース組織の東京ハブメンバーを務めているのですが、この経歴についてはご自身のプロフィールに記載している方が多いのです。だから、講演等に行くと、「実は私もメンバーです」と言って話をするきっかけになりますし、話をすると「仲間感」が生まれます。ただ、残念なことに、内閣府事業に参加したことが書いてある人はほとんどいない。あの体験をした者同士であれば、少しでも社会が良くなるようにとことん考えたあの日々を経験した者同士であれば、根幹のところまでつながれるのに、もったいないと思っています。プロフィールに経歴として記載するメリットを感じないから書かないのでしょうか。

渡部カンコロンゴ清花氏プロフィール

日本に来た難民の活躍機会を作り出す NPO 法人 WELgee 代表。様々な背景を持つ子ども若者が出入りする実家で育つ。大学時代はバングラデシュの紛争地にて NGO の駐在員・国連開発計画(UNDP)インターンとして平和構築プロジェクトに参画。英語より得意なのはバングラの先住民族語(日本人で 2 人しか話せない)！ 2016 年に日本に逃れてきた難民の仲間たちと WELgee を設立。難民認定わずか数十人という日本で、難民を社会を共に変革していくパートナーとして捉え、経験・スキル・意欲を活かした伴走型の就労事業「JobCopass」などを運営。グローバル・コンソーシアム INCO 主催『Woman Entrepreneur of the Year Award 2018』グランプリ。Forbes 30 under 30 の Japan / Asia 選出。チャンピオンオブザチェンジ 2020 受賞。静岡文化芸術大学卒業、東京大学大学院 総合文化研究科・人間の安全保障プログラム 修士課程修了。Global Shapers Tokyo hub 所属。トビタテ！留学 JAPAN 一期生。内閣府第 24 回「世界青年の船」事業代表青年。初めての 0 歳児育児に奮闘中！